

第1講 SVの発見

2. 知覚動詞

(1) 知覚動詞 + 目的語 + 原形不定詞

その動作が始まってから終わるまですべてを見たり聞いたりすることを表す。

(2) 知覚動詞 + 目的語 + 現在分詞（動名詞）

その動作の一時点を見たり聞いたりすることを表す。

(3) 知覚動詞 + 目的語 + 過去分詞

目的語が～されるのを見たり聞いたりすることを表す。

4. 動名詞・分詞とその意味上の主語は<主語+述語>の関係にある。

(1) I don't like your [you] smoking in our room.

There is a strong possibility of their [them] helping us.

I can really understand his [him] composing those kinds of music.

動名詞が他動詞や前置詞の目的語の時は、所有格が良いが、くだけた言い方では目的格の方が多い。

(4) Generally speaking, men are taller than women.

慣用的な分詞構文=>熟語として覚える

分詞の意味上の主語を明示しない慣用表現がある。厳密に言えば、分詞の意味上の主語は「不特定の人々」や「話者」ということになるが、意味上の主語を気にする必要はない。

このような表現には次のようなものがある。

frankly speaking (率直に言って)

Frankly speaking, I don't want to see my name on that list.

(率直に言って、私はそのリストに自分の名前を見たくない。)

speaking [talking] of ...(...と言えば)

Speaking of music, I like various genres.

(音楽と言えば、私はさまざまなジャンルが好きです。)

generally speaking (一般的に言って)

Generally speaking, babies start talking at around eighteen months.

(一般的に言って、赤ん坊は生後18ヶ月くらいで話し始める。)

strictly speaking (厳密に言えば)

Strictly speaking, beta carotene is not a vitamin.

(厳密に言えば、ベータカロテンはビタミンではない。)

judging from ...(...から判断すると)

Judging from the look of satisfaction on her face, that wine must have tasted awfully good.

(彼女の顔の満足げな表情からすると、あのワインは相当おいしかったのでしょうね。)

considering ... (...を考慮すれば)

Considering his age, his health has been remarkable.

(年齢を考えると、彼の健康状態はすばらしいものだ。)

taking A into consideration (A を考慮に入れれば)

Taking everything into consideration, are you satisfied with your marriage?

(あれこれすべてを考え合わせると、あなたは自分の結婚に満足ですか？)

(5)付帯状況の with

主節で表していることと同時に起こっている事柄を補足的に説明する時に、「with + (代)名詞 + 分詞」の形が使われることがある。この場合、(代)名詞は分詞の意味上の主語になる。(代)名詞なしで「with + 分詞」の形で用いることはできない。また、with の後ろに所有格の名詞を続けることはできない。

(1)では、「with tears running down」が「涙が流れている」様子を補足して説明している。ここでは現在分詞(動名詞)が使われているので、「Her tears were running down.」という能動態の文に相当する内容が表されている。つまり、「彼女は本を読んでいて、それと同時に涙を流していた」という状況が表現されている訳である。

(2)では、過去分詞「crossed」が使われているので、with 以下には「His legs were crossed.」という受動態の文に相当する内容が表されていることになる。つまり、「その男性はベンチに座っていて、それと同時に彼の足は組まれていた」という状況が表現されている。

第2講

2. 時・条件を表す副詞節で未来を表す現在形

If it rains tomorrow, I'll have to put off the hiking.

when や if などの「時」や「条件」を表す接続詞を用いると、それに続く節の中では「実際に成り立つ」と考えられることを扱うことになる。従って、未来のことであっても「実際にあること」と考へるので現在形で表す。

1. 「時」を表す接続詞

when (～する時に) , before (～する前に) , after (～した後に) , until/til (～するまで) , by the time (～するまでには) , as soon as (～するとすぐに) 等

2 「条件」を表す接続詞

if (もし～なら) , unless (～しない限り) 等

注意！ 副詞節と名詞節

when や if の後で現在形を使うのは、その節が副詞の働きをしている場合である。when や if の作る節が名詞の働きをしているのであれば、未来のことを扱う場合には、今から未来のことについて推測することになるか、未来にすることについて自分がどんなつもりでいるかを述べることになる。

(1) Tell me when she will come back. (名詞節) 「彼女がいつ戻ってくるのか教えてください。」

(2) Tell me when she comes back. (副詞節) 「彼女が戻ってきたら教えてください。」

(1)の場合、「今教えてくれ」 + 「彼女がいつ戻る予定なのか」という内容なので、「will」が必要になる。

(2)の場合、「彼女が実際に戻ってきた」 + 「その時に（戻ってきたことを）教えてくれ」という内容であり、推測の入る余地がないので「will」は用いない。

(3) I wonder if it will rain tomorrow. (名詞節)

明日雨が降るかなあ。

(4) I will stay home if it rains tomorrow. (副詞節)

明日雨が降れば、家にいます。

(3)は未来のことについて、今推測している。(4)は「明日実際に雨が降るとしたら」と言っているので、「will」は用いない。

過去のある時点から見た未来を表す場合、時や条件を表す副詞節であれば、過去形を使うことになる。

He decided to wait at the station until his wife came.

彼は妻が来るまで、駅で待つことに決めた。

「条件」を表す if 節の中で「will」を用いる場合。

if 節の中で、相手に対する依頼を表す場合には、「will」を用いる。

I'll be happy if you will make a speech at the conference.

「あなたが会議でスピーチをしてくださるのなら、うれしいのですが。」

また、2・3人称の主語で、「どうしても～する」という強い意志を表す場合にも、「will」が用いられる。

If you will go out in this storm, I won't stop you.

「この嵐の中をどうしても出かけるつもりなら、止めません。」

8. <cannot[may/must] have + 過去分詞>

9. <should have + 過去分詞>

助動詞のイメージ

1. can

can の基本イメージは**可能性**。「理屈などから考えて～であります、その気があれば実行する可能性がある、状況が整えば起こる可能性がある」などといったイメージを持って発言する時に can を使う。

「能力」を表す場合の「I can run fast.」というのは、「その気になれば早く走れる。」ということを表しており、実際にやっていることを表している訳ではない。否定文の場合は、「やろうと思っても、能力不足・知識不足で無理」ということになるから、「He cannot answer the question.」は「(答えようと頑張つても) その質問に彼は答えられない。」という意味合いになる。

「許可」を表す場合も基本は同じ。「Can I read your book? (あなたの本を読んでもいい?)」も、「あなたの本を私が読めるという可能性はある?」という感じで、相手に決定してもらおうというところから生じている。

「可能性」を表す can は基本イメージそのまま。「It can be quite cold here in winter.」「ここの地理的条件などから考えてそうなることもある」ということ。この場合、「条件さえそろえば実現しうる」ことなので、「実際に時々ある」ことまで含む。

2. may

may の基本イメージは**容認**。「そうであっても別に構わない・問題ない」という気持ちでいる時に may を使う。裏を返せば、「そうじゃなくてもそれはそれで構わない」ということだから、may を使うと、「あってもなくてもおかしくない」ような「ゆるい」状況を示すことになる。

「許可」を表す時にも、「やりたいのならやっていいし、やらなくても別に構わない」という含みを持つことになる。「You may come in if you wish. (そうしたければ入ってもよろしい)」のように、言わば「上から目線」で「やっても文句は言わないとぞ」という気持ちを相手に伝えることになる。

「推量」を表す may も同じ。「そうであってもいいんじゃない(でも、どっちでもいいけど)」という感じを表す。「This may or may not be true. (本当かもしれないし、本当じゃないかもしれない)」というふうに、どっちの可能性も同じくらいあるような場合に用いられる。

3. must

must の基本イメージは**必然性**。「理屈などから考えて～でないとおかしい、～に決っている」と考えられる時に must を用いる。

「義務・必要」を表す場合も、「～でないとおかしいから、～しないとダメだ」という意識が働く。そこで、1人称主語で、「I must get this assignment done by five.」などとすると、「5時までには宿題を絶対やり終えるぞ」という強い決意の意味合いが出るし、2人称や3人称主語で、「You must attend the meeting.」などとすれば、「会合に絶対出席しなきゃね」という強い助言・勧告などの意味合いが出る。

なお、否定文で「He must not attend the meeting.」とした場合は"not attend the meeting"という状況を「絶対」のものと捉えることになるので、「『彼が会合に出席しない』でないとおかしい」→「彼は会合に出席してはいけない」という禁止の意味合いになる。

「確信」を表す must も「～でないとおかしい」→「(客観的に事実として示すことこそ出来ないが) ～に決っている・違いない」という意識が働く。「You must be hungry after all that walking. (あんなに歩いた後じゃあ、おなかが空いているに決まっているよね)」という文の背後にも「そうじゃないとおかしい」という意識がある。

4. should

should の基本イメージは正当性。「本来～であるのが正しい、～であって当然だ」と考えられる時に should を用いる。「義務・当然の行動」を表す場合、「やって当たり前(だからやらなきゃ)」という含みを持つ。同時に、「やってはいけないことをやってるぞ」という指摘をしたり、「本当はやらなきゃいけないのにやっていないね」という批判的な意味合いを込めて使われていることが多い。

You should park your car there. 「あっちに駐車しなくちゃいけないよ」(裏に"You shouldn't park your car here." 「ここに駐車してはダメだよ」などという含みがあることが多い。)

should が表すのは、あくまで「～であるのが正しい」という意味合いだけだから、現実には「正しい状況」になっていない場合も多いので、それに対して小言を言ったりする時にもよく使われる。

「推量」を表す場合も「本来は～であるのが正しい」→「だから～のはずだ」という連想関係が働く。こちらもあくまで「そうであるのが正しいからそのはず」と思っているだけなので、現実とは食い違っていることもある。「The bus should arrive in a few minutes.」と言った場合は、「ふつうそうだから」とか「このバス会社は信頼できるから」などと言った考えに基づいて「数分でバスが来るはずだ」と言っているのであって、実際には、渋滞や事故などの理由で「数分では来ない」こともあり得ることを含んでいる。

<倒置>

英語は語順がきちんと決まっている言語なので、主語と動詞の順を逆にするのにも一定の決まりがある。何らかの理由で主語と動詞の順が逆になることを倒置という。

1. 否定を表す副詞（句）が文頭に出る。

a. I have never seen such a beautiful rainbow. -> Never have I seen such a beautiful rainbow.

「私はこんなに美しい虹を一度も見たことがない。」

b. He rarely tells a joke. -> Rarely does he tell a joke. 「彼はめったに冗談を言わない。」

a.の never、b.の rarely のような否定の意味を持つ副詞（句）が強調のために文頭に置かれると、その語は Yes/No 疑問文と同じ語順になる。

文頭に置かれて倒置が起こる主な副詞（句）には、次のようなものもある。

at no time (一度も～ない) seldom (めったに～ない) hardly (ほとんど～ない)

scarcely (ほとんど～ない) little (まったく～ない) on no account (決して～ない)

under no circumstances (どんな状況でも～ない) 等

At no time did the actor mention his private life.

「その俳優は、一度も私生活のことに触れたことはなかった。」

無生物主語

英語→日本語にする場合

とりあえず直訳する。直訳した日本語から更に日本語に訳す。その場合、目的語の位置に置かれている人称代名詞を主語にしてみる。主語は理由や原因、条件等が多いので、「～なので、～のため」等と訳してみる。

無生物主語の知識が問われる問題の多くが「並び替え問題」である。ただ、仮に無生物主語の知識がなくても、英語の構文の知識があれば解ける。

1 無生物主語構文

5. It annoyed me to hear him talking to himself.

ア) 形式主語->真の主語 「to hear him talking to himself.」

イ) 知覚動詞->to hear him talking

6. Nothing will stop her from spending a lot of money.

何も彼女がたくさんのお金を使うことを終わらせるものはないだろう。

→何をしても彼女は多額のお金を使いまくるだろう。

<類例>

9. The year 1954 saw the outbreak of the Vietnam War.

1954 年がベトナム戦争の勃発を見た。

→1954 年にベトナム戦争が勃発した。

3 無生物主語構文の訳し方

(5) The subway helps people move around the town easily.

help + O + to 不定詞/原形不定詞

4 名詞表現が無生物主語のときは、名詞表現を動詞的に訳す。

(3) The birth of a child will make the relationship between you and your husband change.

使役動詞 + O + 原型不定詞

P.14

(8) He is not here; he (has gone) shopping. -> has been going ではない理由。

現在完了進行形は、過去のある時から現在まで続いてきた動作・出来事を表す。今後も続くことを明示している場合もあり、直前に終了したことを表す場合もある。

第4講

名詞構文

2. <動詞+名詞>

動詞+名詞が1つの動詞と同じ意味を持つことがある。熟語として覚えるのが良い。

5. <of+抽象名詞>

形容詞の意味になる。が、あまり難しく考える必要はない。とりあえず直訳してみれば良い。

6. <with+抽象名詞>

ここもとりあえず直訳してみる。例えば「with ease」は「気楽さと一緒に、容易さを持って」くらいで構わない。これを踏まえ文脈から自分で直訳から逸脱しない範囲で理解すれば良い。

with のイメージ

with は元来「～と共に」の意味であり、「何かの原因が伴つてある事態が起こっている」というようなときに用いる。

また、関係や関連を表すときにも用いられる。

Something is wrong with this computer. (このコンピューターはどこかおかしい。)

with の意味の広がり

1. 対象

I agree with you. (私はあなたに同意します。賛成です。)

2. 原因

She is busy with her homework. (彼女は宿題で忙しい。)

3. 所有・携帯

I'm looking for an apartment with a garage. (私は車庫付きのアパートを探している。)

4. 道具

She ate her ramen with a fork. (彼女はラーメンをフォークで食べた。)

5. 様態

She solved the problem with ease. (彼女は簡単にその問題を解いた。)

6. 付帯状況

He entered the dark house with his legs shaking with fear. (彼は恐怖で足を震わせながら暗い家に入った。)

(with fear は様態)

could/would の用法

●肯定文で「～できた」というときには、過去のことであるということが分かる文脈でなければ、「was able to」を使うのが普通。ただし、否定文の場合は「couldn't」でかまわない。

●肯定文だと、例えば「I could write it better myself.」は「私ならもっと上手に書けるよ。」のように仮定法の条件節の省略と捉えられるのがふつう。

●would は could と同じように、条件の if 節が省略された仮定法に使われることが極めて多い。例えば「I would like to do something...」は if 節が省略され、ニュアンスとして「もし差し支えなければ」や、「もしできましたら」等といった遠慮がちなものなので、そこから「柔らかく」、「丁寧な印象」を与える表現になっている。

第5講

関係詞の研究

2 関係副詞：副詞と接続詞の働き

関係副詞は、関係詞節内で副詞の役割を果たす。関係副詞には次の種類がある。

先行詞	場所を表す語	時を表す語	reason(s)	なし
関係副詞	where	when	why	how

① Shakespeare was born in a town. (シェークスピアはある町で生まれました。)

② Do you know that town? (あなたはその町を知っていますか？)

① + ②を関係代名詞を使って表す。

Do you know the town **in which** Shakespeare was born?

この **in which** を **where** で置き換えることができる。

Do you know the town **where** Shakespeare was born?

ここでの **where** は、Shakespeare was born **there** の **there** と同じように、場所を表す副詞として使われている。これが**関係副詞**である。

●where と前置詞+which

where は関係詞節内で場所を表す副詞の役割をしているので、関係代名詞を使って、「場所を表す前置詞+関係代名詞」で書き換えることができる。「前置詞+（代）名詞」は副詞として働くことができるのだから、「前置詞+関係代名詞」は「関係副詞」として働くのである。この時、その前置詞を使うかは、先行詞と関係詞節内の動詞との関係を考えて決めることになる。

This is the hospital **where** my aunt works. (これが私の叔母が働いている病院です。)

→This is the hospital **at which** my aunt works. (My aunt works **at** the hospital.)

Here's a map of the town **where** Erika lives. (これが、エリカが住んでいる町の地図です。)

→Here's a map of the town **in which** Erika lives. (Erika lives **in** the town.)

副詞とは？

英語の副詞は、他の品詞に分類できない修飾要素をつけた名前である。副詞のもつ意味がさまざまであり、文中での位置もバラバラなのは、もともと不統一のものを 1 つの名前でまとめて呼んでいる以上、当たり前である。それでも、副詞の位置と働きについての原則を把握しておけば、英文の理解に役立つことは間違いない。

●副詞の持つ意味で決まる。

①様態（動作が**どのように行われるか**を示す。）

He speaks **slowly**. (彼は**ゆっくりと**話す。)

②場所（動作が**どこで行われるか**を示す。）

He met Tom **here**. (彼は**ここで**トムに会った。)

③時（動作が**いつ行われるか**を示す。）

He visited us **yesterday**. (彼は**昨日**私たちを訪ねてきた。)

④頻度（動作が**どのくらいの頻度で行われるか**を示す。）

He **often** visits his grandmother. (彼は**しばしば**祖母に会いに行く。)

⑤程度（動作が**どの程度行われるか**を示す。）

He **almost** ran over a cat. (彼は**もう少し**でネコをひくところだった。)

●何を修飾するかで決まる。

①動詞を修飾する。(上の例文を参照)

②形容詞やほかの副詞を修飾する。

This medicine is **very** effectiveness. (この薬は**とても**よく効く。)

③文全体を就職する。

Fortunately, he didn't die. (**幸運にも**、彼は死なずにすんだ。)

●文脈の中で決まる。

基本的には文の後ろの方に置く副詞でも、文脈の中で話題の中心となったり、他の副詞と対比されたりする場合は、文頭に置かれことがある。

Yesterday I didn't feel like eating out; **today** I'd love to.

(**昨日は**外食したくなかったけど、**今日は**外食したいよ。)